

2022年3月13日（日）／説教者：國分美生

説教：「ただ主のみを神として」

聖書：コリントの信徒への手紙一 10：1～13

当時コリント教会の中には、異教の神々の神殿における食事や祭りに出席していた者がいたようです。パウロは偶像礼拝に参加することは、キリストを試みることに、主の妬みを起こさせるものであると警告します。偶像礼拝をする、ということは神との関係・隣人との関係を壊すものであることをパウロは伝えようとしていました。

キリスト教と無関係の文化・習慣は私たちにも馴染みがあるものです。お正月やお盆、成人式は仏教や神道の影響。初日の出を見るという習慣も、元は天皇の元旦の儀式が庶民の間に根付いたもの。沖縄では、先祖供養であるシーミーや、仏教由来の13祝い、エイサーは大事な年中行事です。それらが偶像礼拝に当たらないか気になることもあるかもしれません。ですがパウロが最も言いたいのは、日常生活としての文化・習慣そのものに対しての言及ではないようです。

14節以下でパウロは、偶像礼拝がなぜ問題なのかを語ります。今仕えている、このイエス・キリストの父なる神に対して行っているように、他の神に全身全霊で仕えることはできない。つまり、自分の人生を丸ごと委ね、人生の指針を求め求める相手が、イエス・キリストの父なる神以外であってはならないとパウロは言うのです。それは「何を自分の人生の中心とするのか」という問いかけとして響いてきます。私たちの心に偶像として入り込んでくるのは、他の宗教の神だけではなく、お金や武力・暴力、権力…時には自分自身を神とすることがあります。それらがいかに恐ろしいものであるかを、私たちは沖縄が受けた歴史を通して、そして今日の前の戦争を通して思い知らされます。平和の主である神が戦争をよしとするはずがないと私たちは知っています。ですが自分を神であるかのように信じ、それによって相手を攻撃し、命を奪うことを正当化するということが人間によって行われてきました。日本も日米同盟のもと、アメリカと共にウクライナに武器を支援しています。アメリカの植民地である日本にとっては、もしかするとアメリカが「神」なのかもしれません。

私たちはどこからきて、どこに向かうのか。そして何を目指し、どのように生きていくのか。私たちが持つそのような根源的な問いに対し、答えることが出来るのは私たちの救い主である主だけです。キリストに従う私たちにとって平和への道しるべは、イエス・キリストのみです。（國分美生）